

図書館だより

BUNKA GAKUEN LIBRARY

文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院・文化外国語専門学校
東京都渋谷区代々木3-22-1 TEL.03-3299-2395 FAX.03-3299-2604

No.177

文化学園図書館

2023年10月25日発行

私を創った本 教員編 第1回

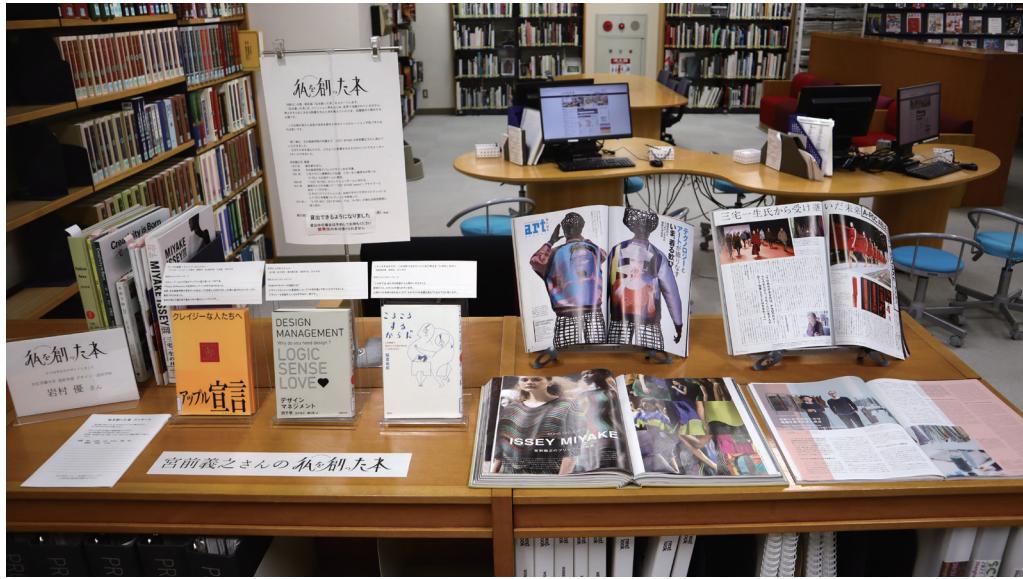
文化学園図書館では今年度より新企画「私を創った本」をスタートさせました。

「私を創った本」は、ファッション界をはじめ、各界で活躍されている方から、考え方や人生に大きな影響を与えた本を教えていただき、図書館内で展示する企画です。

その本を読むことで、学生の皆さん自身の未来を創るためにインスピレーションや気づきになれば幸いです。

第1弾は、文化服装学院の卒業生で、ISSEY MIYAKEの宮前義之さんに選んでいただきました。

第2弾は、同じく文化服装学院卒業生で、アーティストのとんだ林蘭さん。これは、ROSETTOGO 50周年企画とのコラボレーションです。今年の文化祭ではとんだ林さんがデザインしたソファを館内で展示しますので、本と併せてお楽しみください。



展示風景(第1弾)

さて、今号の内容ですが、この企画を進める中で、各分野の専門家である文化学園の先生方の「私を創った本」も聞いてみたいという声が挙がりました。というわけで、企画の本線とは別に、『図書館だより』にて「私を創った本教員編」を行うことにしました。

第1回は文化服装学院から学院長および2名の先生に選んでいただきました。

今から45年前、まだ文化服装学院の学生だった私に、担任の先生が手渡してくださったのが元学院長である原田茂先生の著書『たてよこの糸 洋裁教育五十五年』でした。

原田先生は洋服の研究こそこれから待ち望まれる分野だと志し、ちょうど100年前となる1923年、熊本から上京して文化裁縫女学校に入学。卒業と同時に、母校の教師となった卒業生第一号であり、以来55年間、学院の服装教育一筋に歩んだ先生です。

その一部をご紹介いたします。

「服装は着る人の紹介状である、と言われるように、服の色や形はその人の心のあり方を表わすもので、床(ゆか)しい心の持ち主は服装にそれが表われている。その反対の場合も言えるわけで、表面の美を追求するだけでなく内面的な心の美も忘れてはいけません。また、服の美しさはその服を身につける人とマッチしてこそはじめてその美を十二分に發揮するもので、どんな時代の先端をいくすばらしい服でも、その人に似あっていなければ美しいとはいえないません。」

原田先生は「ゆかしい心」の美しさを大切にし、「常に謙虚であれ」と事あるごとに学生たちに伝えていたそうですが、服装教育に45年携わっている私もまた、先生の矜持に思いを馳せ、これから先へと伝えていかなければと思うのです。

そうした文化服装学院の精神は、すみれの花に象徴されております。

校歌にも歌われるすみれの花は、「うつふして 匂う春野の花すみれ 人の心にうつしてしかな」という貞明皇后⁽¹⁾の御歌が由来となったと書かれています。浅春の野原につつましくも高雅な姿で咲くすみれの花に、文化服装学院の創設に携わった先人たちの“謙虚な心を持ち、美しくありたいという願い”が込められ、校章・校歌に指定されたと私も聞き及んでおります。

もちろんスクールカラーの紫色もすみれの花から取られたものです。6月23日の創立100周年式典でも随所にスクールカラーが使われており、歴史と思いのこもったこの紫色が誇らしく、この上なく美しいものでした。

〈 〉内は、当館の請求記号です。

6月16日に開催したドレスコード登校日でも、多くの在校生が紫色を取り入れた思い思いのコーディネートで集まり、学園全体が大いに盛り上がったことは記憶に新しいでしょう。

100年に渡る文化服装学院の歩み、その出発点に立っていた原田先生。目まぐるしく変わった社会情勢と女性の生き方、そして服装教育の発展について一人の女性の目を通して仔細に書かれたこの本を、この記念の年に手に取っていただき、文化学園がファッション界で担ってきた100年の重みを感じていただきたいと思います。

(1)『たてよこの糸』には「昭憲皇太后的御歌」とあるが、佐佐木信綱著『貞明皇后御歌謹解』第二書房(1951)等によれば、貞明皇后が詠まれた御歌と思われる。



原田茂著『たてよこの糸 洋裁教育五十五年』
文化出版局(1978)〈593.028/H〉

相原 幸子

文化服装学院 学院長

文化服装学院服飾産業科を卒業後、同学院の教育専攻科に進学、卒業後38年間の教員生活の中で送り出した卒業生は3,000名以上。多くの卒業生が世界中で活躍している。可能性は誰にでもあるもの。その可能性を導くことができる仕事に誇りを持っている。2009年、ファッション工科専門課程グループ長、2016年7月、文化服装学院副学院長、2017年7月より現職。

【著書】

『いつまでも美しく装うための30のこころえ』文化学園文化出版局(2018)



梅原猛『人類哲学序説』岩波新書

今でも紙の新聞に目を通す。以前は梅原猛氏、加藤周一氏、吉田秀和氏ら日本の知の巨人たちが、連載を重ねていた。皆さんどれだけモノを知っていて、どこまで興味が広がっているのかと驚くほどの方々である。その先生方が相次いで逝ってしまった。だれでもデカルトだ、カントだ、ニーチェだと格好つけたがる少年時代がある。デカルトから始まった西洋哲学は、人間は理性を持つことによって、自然より絶対的優位に立ったという。しかし富士山に毎年登り浅間神社に手を合わせ、森戸神社（私の活動拠点の神社）の海の神様に手を合わせ、八百万の神々とともに生きてきた自分にはそれらは何か釈然としない違和感を持ったものだ。この本との出会いによって、西洋と東洋の価値観を俯瞰的にとらえる見方を教わった。そんな一冊です。

榎木野衣『シミュレーションズム』

以前、デザイナーの坂部三樹郎氏と話す機会があった。彼曰く、「ファッションって現代アートや音楽など他のジャンルのワードでほとんど説明してきましたよね。ファッション独自のワードで説明することはできないですか？」と言われた。ファッション史を生業とする私がまず思ったことは「そんなこと考えたことないし、できねえよ」。衝撃だった。確かにファッションは、モダニズム、ミニマリズム、パンク、グランジetc. …ほとんど他業界のワードを借用して説明してきた。蘆田裕史氏は『言葉と衣服』（アダチプレス）の中で「通常、各ジャンル（絵画、音楽、建築…）に固有の語法は理論家や研究者、あるいは批評家が概念規定を行い、それに対する批判的な検討がくわえられることによって次第に明確なものとなってくる。だが、ファッションは残念ながらそうしたプロセスを経てきてはいない」という。したがってファッション固有のワードが少ないということになる。でもファッションを深く理解するにはまず現代アート、デザイン、そして音楽を理解してからだ。20年以上前に一度読んだが、その後も繰り返して読んでいる一冊です。

Phillis Cunnington & Catherine Lucas『Occupational Costume in England from the Eleventh Century to 1914』

Diana de Marly『Working Dress : A History of Occupational Clothing』

モノの歴史にはなんにでもある種の法則性がある。ほとんどのモノがどの時代でも、どこの地域の文化でも似通った法則によって変化遷移しているということだ。服飾でいうと、「インナーのアウター化」と「ミリタリーウエアなど機能服や庶民服のフォーマル化」がそれに当た

るだろう。後者に関しては中野香織氏が『スーツの神話』（文藝春秋）の中で、衣服の「下剋上」という言葉を使ってうまく表現している。ということは、今現在フォーマルウエアとしては考えられないアイテムが、将来のフォーマルウエアになりうる可能性があると言えなくもない。その時代のハイファッショングの変遷を解説してくれる文献はいくらもある。ないのが私自身興味のある庶民服の変遷である。英語の著作だが、この2冊の庶民服の歴史の中に、ファッションの未来を探してみては？



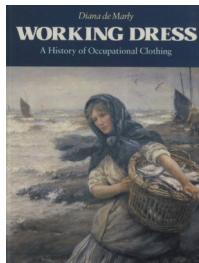
梅原猛『人類哲学序説』(岩波新書
新赤版 1422)岩波書店(2013)
(081/I/1422)



榎木野衣『シミュレーションズム』
増補(ちくま学芸文庫)筑摩書房
(2001)<704/S>



Phillis Cunnington & Catherine Lucas『Occupational Costume in England from the Eleventh Century to 1914』A&C. Black
(1967)<383.133/C>



Diana de Marly『Working Dress : A History of Occupational Clothing』
Batsford(1986)<383.133/M>

朝日 真

文化服装学院 専任教授

専門は西洋服装史、ファッション文化論。1988年早稲田大学文学部卒業後、文化服装学院服飾研究科修了。1995年より同院にて教鞭を執る。2015年より現職。



【著書】

ノエル・パロモ=ロヴィンスキー著 和田侑子訳『もっとも影響力を持つ50人のファッションデザイナー』(監修)グラフィック社(2012)

吉田奈緒子、森千花編『旅と想像／創造 いつかあなたの旅になる』(執筆)東京都庭園美術館(2022)

奥主博之ほか執筆・協力『モンスター・ハンターライズ超服飾学 お気に入りの1着がもっと好きになる!』(執筆・協力)インプレス(2022)

朝日真ほか執筆・監修『Fashion On Tiles:あの時代、この国のおしゃれさん』INAXライブミュージアム(2022)

原田美砂著『直感を信じて、進め。』

今では世界で活躍する帽子デザイナーとなった日本人女性の自叙伝です。

とにかく日本を出たい、海外に行きたいという一心で18歳でロンドンの大学へ入学した彼女が、直感を信じて自身の夢に向かってがむしゃらに頑張っていく姿が描かれている本です。私がこの本と出会ったのは、文化服装学院に学生として在籍していたときでした。ちょうど彼女の特別講義がこの学園で行われ、聴講したときにこの本にサインをいただいた思い出があります。

私は中学生のころ、ファッション業界に憧れ、一度ファッションの道に進もうと服飾が学べる高校へ進学を考えたことがありました。それを自分に自信がないという理由だけで一旦諦めたことがあります。その後は進路もこれといってはっきり決めることができず、そのまま進学校へ入学し、大学では哲学を専攻する、という今とはかけ離れた生活をしていました。しかし、どうしてもファッションの勉強をしたいという気持ちが消えず、地方から私なりの一大決心をして東京出てきました。その時には自分の自信のなさはもうどうでも良くなっていました。今までずっと抱えていた迷いを一度吹っ切って、ファッションの勉強をしたいという想いだけで行動を起こしました。

この本に描かれているスケールの大きさは私自身のものとは当然違いますが、境遇や想いが重なる部分も多く感じられ（進学校へ入学され、その後大学で哲学を専攻されていた、というところが偶然私と同じだったのでシンパシーを感じました）、このまま自分の直感を信じて帽子の勉強をしていこう、と勇気づけられたことを覚えています。自分のやりたいことや気になったことに取り組むのに年齢や時期は関係ないと思います。一度やってみて違うなと思ったらいつでもやめればいいし、いつでも再スタートすればいいんじゃないかなと思います。そんな気持ちにさせてくれる本です。

Kevin Davies『Philip Treacy』

世界的に有名な帽子デザイナー、フィリップ・トレシーの本です。私が好きな帽子デザイナーのひとりです。

もちろん素敵な帽子の写真がいくつも載っているのですが、この本の見どころは、作品制作の舞台裏がより多く載っているところだと思います。ものづくりが好きな方には特におすすめです。帽子の作り方が載っているわけではありませんが、インスピレーションを掻き立てられる写真にたくさん出会えると思います。

帽子はお洋服に比べると小さなアイテムです。しかし、小さなアイテムであるにもかかわらず、ファッションの全体イメージをガラリと変えてしまうくらいの大きなパワーがあるアイテムだと思っています。それが私が帽子を好きな理由です。この本は、そんな夢が実現されていくのを目の当たりにできる本です。



原田美砂著『直感を信じて、進め。』
WAVE出版(2010)〈589.26/H〉

Kevin Davies『Philip Treacy』
Phaidon(2013)〈589.26/T〉

板野 景子

文化服装学院 専任講師

岡山大学文学部卒業。2012年文化服装学院ファッション工芸専門課程 帽子・ジュエリーデザイン科を卒業後、同院にて専任助手を経て2018年より現職。専門は帽子デザイン。

不明な点は下記にお問い合わせくださいか、ホームページをご覧ください

TEL:03-3299-2395 [URL]<https://lib.bunka.ac.jp>

X(旧twitter)とfacebookにて図書館の情報を発信しています

[X(旧twitter)]<https://twitter.com/bunkalib> [facebook]<https://www.facebook.com/lib.bunka>



文化学園は、2023年に創立100周年を迎えました。
記念ロゴマークは、本学園の学生がデザインしました。